

あの日に思い出す

上 廣 榮 治

あの東日本大震災と福島原発事故から二年が経とうとしています。おそらく、それを報じる新聞やテレビではまた、「天災は忘れた頃にやってくる」というあの言葉が、たくさん使われることでしょう。この有名な警句を最初に言い出したのは、大正から昭和の初めにかけて活躍した物理学者で随筆家でもあった寺田寅彦（てらた びんご）だといわれています。夏目漱石の「吾輩は猫である」に登場する水島寒月先生（みづのしま せんと）のモデルになった人だそうです。

彼はあるエッセイの中で、文明が進めば進むほど天災による被害の程度も大きくなるといい、人災である「戦争は是非とも避けようと思えば人間の力で避けられなくはないであろうが、天災ばかりは科学の力でもその襲来を中止させる訳にはいかない」。だから、最後通牒（ラスト・通牒）もなく突然攻撃してくる天災のことを忘れず、ふだんから備えておかなければならないと警告しています。人災は避けなければならず、天災は備えなければならぬのです。

二年前の大震災は、その天災と人災が一緒に来たようなものでした。今後どれほどの影響を残すか予想す

らできない原発事故を経験しながら、いまだに安全神話を振り撒いている専門家がいます。それにすがろうとしている人たちもいます。「忘れた頃」というには早すぎます。寺田博士が生きていたら、「人間というのは驚かないものだねえ」と、さぞかし嘆息ため息されることでしょう。

すぐれた隨筆を多く残した寺田寅彦ですが、その中に、「科学者とあたま」という面白いエッセイがあります。一言でいえば、どんなタイプの人間が科学者に適しているかを述べたものです。八十年も前に書かれたものですが、大震災と原発事故を経験したいま、一読に値する内容です。

エッセイの冒頭で博士は、科学者になるには「頭がよくなくてはいけない」が、またその一方で「頭が悪くなくてはいけない」と述べています。ふつう、頭がよくなければ科学者にはなれないと、誰もが思っています。ところが彼は、科学者は頭の悪さも大切だということです。そして、頭のいい人の欠点と、頭が悪い人の利点を次々に挙げていきます。

頭のいい人は「足の早い旅人」に似ていて、人より早く誰も行ったことのないところへ行き着くことができます。そのかわり、途中の道端や脇道にある肝心なものを見落とす恐れもあります。しかし、頭の悪い人は「足の遅い旅人」のようにのろのろと歩きながら、頭のいい人が見落とした大事な宝物を拾っていく場合があります。なんだから「イソップ物語」のウサギとカメの話に似ています。

また、頭のいい人は富士山のすそ野まで来て、そこから頂上を眺めただけで富士のすべてがわかったつもりになって、山へ登らず引き返してしまいかもしれません。やはり富士山は登ってみなければわからないのに、です。あるいは、頭のいい人は見通しがきくだけに、あらゆる道筋の前途の難関が見渡されて、詰めてしまいがちです。ところが、頭の悪い人は前途の見通しがきかないぶん樂觀的ですから、難関にも挑戦して、なんとかそれを切り抜けていく。なぜなら、乗り越えられない難関など種たぐいであるからだ、というので

す。のろのろ歩くカメの方に、最後は軍配が上がるというわけです。肝心なのは頭のよし悪しよりも、地道な努力こそが大切なのです。

寺田寅彦は、科学者の資質として「頭のよさ」と「頭の悪さ」がともに必要だとしながらも、どうやら彼は、頭の悪い人に好感をもっているようです。そこが科学者ではない私たちにも、このエッセイが身近なものに感じられる理由なのかもしれません。

「科学者とあたま」を「実践者とあたま」に置き換えれば、理屈で倫理がわかったと思う人と、愚直に実践を貫く人の違いのようにも読み取れます。

さらに寺田寅彦は、頭のいい人と悪い人の自然との付き合い方の違いについても、とても印象深いことを書いています。

頭のいい人は頭の力を過信するあまり、自然の現象が自分の頭で考えたことと一致しないと、自然の無限の奥行きを忘れて、「自然のほうが間違っている」とさえ考えてしまいがちです。これでは自然科学は「自然の科学」ではなくなってしまう。

しかし、頭の悪い人は、頭のいい人が駄目に決まっていると決めて手を出さない試みにも一生懸命に取り組んで、駄目でない糸口をつかむことが少なくありません。「自然は書卓の前で手をつかねて空中に絵を描いている人からは逃げ出して、自然のまん中へ赤裸で飛び込んで来る人へのみその神秘の扉を開いて見せる」からだというのです。そして、人間の頭の力の限界を自覚して、謙虚に大自然の教えを乞う覚悟があつてこそ、はじめて科学者になれるのだと博士は論じます。

「頭のいい人には恋ができない。恋は盲目である。科学者になるには自然を恋人としなければならぬ。自然はやはりその恋人にのみ真心を打ち明けるものである」とも言っています。

あなたはノーベル賞のメダルを写真などでご覧になったことがあるでしょうか。賞によってデザインは異なりますが、化学賞と物理学賞は同じです。表はノーベルの肖像で、裏には二人の女神像が描かれています。中央に描かれている女神は「自然（ナトゥーラ）」神で、右側に描かれた「科学（スキエンティア）」の女神が、ナトゥーラのペールをめぐって顔をのぞいている構図です。

かつてノーベル物理学賞を受賞した朝水振一郎博士は「科学と文明」と題する講演で、このメダルについて、「うっかり女性のペールをめぐったりすれば、たいへん失礼だって叱られるのと同じように、科学が自然に対してしていることは、ある意味で自然に対する冒瀆（はつとく）ともいえる」と言っています。

それでも科学は、自然のペールをめぐることを止めないでしょう。しかし、どこまでが冒瀆にあたるのか、どこまでは冒瀆にあたらなかつたかというのは、大きな課題になると思います。朝水さんが言う「冒瀆」には、物理学が原子爆弾を作ってしまったことが想定されていたのです。

原子爆弾や原子力発電が、それまでの科学的な発明品と異なるのは、それらが頭の中で、純粹に物理学の理論から作り出された自然界にはないものだという事です。先ほどの寺田寅彦の文句を借用すれば、「書卓の前で手をつかねて空中に絵を描く」ようにして、頭のいい科学者の頭脳からのみ導き出された技術です。それらは自然と対立し続けて、最後は自然を深く傷つけてしまいました。

私たちは常に「大自然の摂理」によって生かされていることを確かめながら、自然を恋人として「共生」する道を進んでいきたいと思えます。そのためには、自然の一部にすぎない人間に許された「限界」についても、自覚しなければなりません。限界を無視して作られた装置がひとたび暴走を始めたとき、人間にはコントロールできないという恐ろしさを私たちは経験したばかりです。二年前の天災と同じように、あの人もまた忘れ去られてはならないのです。